

# なつかしまれた人

小川未明

青空文庫



まち  
町の運輸会社には、たくさんの人たちが働いていました。そ  
なか  
の中に、勘太というおじいさんがありました。まことに、人のい  
いおじいさんであつて、だれに対してもしんせつであつたのであ  
ります。

わか  
若いものたちがいい争つたりしたときは、いつもおじいさんが  
なか  
中にはいつて仲裁をしました。

「まあ、すこしのことでそんなに怒るものでない。ここに働いて  
いるものは、いわば兄弟も同じことだ。たがいに力になり、  
たす  
助け合うのがほんとうだのに、争うということはない。すこしく  
はら  
らい腹がたつことがあつても忘れて、仲よくしなければならぬ

。「と良かったです。

おじいさんに、やさしくいわれると、だれでもなるほどと思わ  
ずにはいられませんでした。そして、自分たちのしたことがまち  
がっていたと気づくのでありました。

おじいさんは、また仲間が、病気にでもかかると、しんせつ  
にしてやりました。自分の家を離れて、他人の中で病気に  
かか  
つては、どんなに心細いことだろう、そう思つて、できるだ  
けしんせつにしてやつたのであります。

こうした、おじいさんのしんせつは、みんなに感じられたので、  
いつか自分の親のように思つたものもあれば、またいちばん親し  
い人のごとく考えたものもあつたのでした。

「おじいさんの生まれた国は、どこですか。」と行って、聞いたものがありません。けれど、おじいさんは、答えずに、ただ遠い国だとばかりいつていました。

また、おじいさんには子供や、身頼りのものがあるかしらんと、そのことを聞いたものもあります。すると、おじいさんは、さびしく笑いながら、

「やはり、おまえさんくらいな、いいせがれがあるが……。」「と、答えたのでした。

そんないいせがれがあるのに、どうして、こんないいおじいさんが旅へ出ているのだろう、なぜ親と子がいつしよに暮らすことができないのか……。おじいさんは、この年になって、自分の故

きようはな  
郷を離れていたら、さびしかろうと思つたものもありました。

「おじいさんは、なぜこうして旅へなど出ているんですか。」と、わかものなかひとり  
若者の中の、一人は、その理由を知りたいと思つて問いました。

おじいさんは、自分の身の上のことについては、なにを聞かれても、ただ笑顔を見せて、あまり語らなかつたのであるが、

「自分の手足がきいて、働かれる間は、だれの世話にもなりたくないと思つてな……。子供たちのそばにいて働いたのでは、子供たちが、心配すると思つて、それで旅へ出てきたのだ。」と、いつたのでありました。

みんなは、はじめておじいさんの心持ちがわかつたような気がしました。子供たちに対して、そうしたやさしい心をもつ

であるから、自分たちに対しても、やはりこうしてやさしいのであろうと思ひました。

「じや、おじいさんは、いつかまた国へ帰んなさるときがあるんですね。」

「それはあるにはあるが、そうすると、こうして仲よくしているみんなに別れなければならぬ。考えると、そのことがつらいのじや。」と、おじいさんは、長い間、苦辛をしてきた、日にやけてしわの寄つた顔をしやくるようになして、小さな目をしばたいたたのです。破れた鳥打帽子の下から見える髪は、もう灰色になつていました。

この言葉をきくと、若いものたちも、ほつと歎息をつきまし

た。

「俺おれは、自分じぶんの父親ちちおやのように思おもっているのだが、おじいさんと別わかれるのはつらいな。」と、いったものがあります。

「ほんとうにそうだ。まあ、おじいさん、いつまでも俺おれたちといっしょにいてください。」と、いったものもありました。

こうして、勘太かんたじいさんは、この会社かいしゃに働はたらいている若い人わかひとたちから、愛あいされていました。

おじいさんは、よく働はたらきました。みんなの間あいだにまじって、いっしょになって重い荷おもも運はこべば、またかついだりしました。たとえば、年としをとっていても、仕事しごとのうえで、若いものわかに負まけることはなかったが、若いものわかは、なるだけ、この年としをとった、しんせつなお



じいさんをいつもいたわっていたのであります。

こうして、働<sup>はたら</sup>く人々<sup>ひとびと</sup>の社<sup>しゃ</sup>会<sup>かい</sup>には、美<sup>うつく</sup>しい人<sup>にん</sup>情<sup>じょう</sup>の流<sup>なが</sup>れる、

明<sup>あか</sup>るいところがありません。そして、またこうしてしんせつなお

じいさんが、だれか一人<sup>ひとり</sup>、若<sup>わか</sup>いものの中<sup>なか</sup>にいなければならなかつ

たのは、ちようど、人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>の社<sup>しゃ</sup>会<sup>かい</sup>ばかりでなく、他<sup>た</sup>の獣<sup>けもの</sup>物<sup>もの</sup>の集<sup>あつ</sup>

まりの中<sup>なか</sup>でも、経<sup>けい</sup>験<sup>けん</sup>に富<sup>と</sup>んだ、年<sup>とし</sup>寄<sup>よ</sup>りがいて、野<sup>の</sup>原<sup>はら</sup>から、野<sup>の</sup>原<sup>はら</sup>

へ、山<sup>やま</sup>から、山<sup>やま</sup>へ旅<sup>たび</sup>するときには、その年<sup>とし</sup>とつたのが道<sup>みち</sup>案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>と

なつて、みんなが、あとからついてゆくのと同<sup>おな</sup>じでありました。

勘<sup>かん</sup>太<sup>た</sup>じいさんは、毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>、みんなといっしょに働<sup>はたら</sup>いていました。

しかし、ついに、みんなから別<sup>わか</sup>れていかなければならぬときがき

きました。しかも、それは不<sup>ふ</sup>意<sup>い</sup>であつたのです。

おじいさんの息子が、田舎で成功をして、はるばるおじいさんを迎えにきたのでありました。

「おじいさん、長い間、苦勞をさせまして申しわけがありません。わたしは、このほど、ようやく仕事のほうが都合よくいくようになり

ましたから、もうこの後おじいさんに苦勞をかけることもないと思つて、迎えにまいりました。弟や、妹たちは、はやくおじいさんの顔を見たいと待っていますから、どうかすぐに私といつしよに帰つてください。」といいました。

おじいさんは、息子の成功をしたというのを聞いて、どんなに喜ばしく思つたかしれませぬ。どんなに、久しぶりで、子供や、孫たちにあわれるのをうれしく思つたかしれませぬ。けれど会

社やにいるみんなから、しんせつにされているのを、別わかれて帰かえらなければならぬかと思おもうと、またかぎりなく悲かなしかったのであります。

「それは、まあなによりうれしいことだ。」と、口くちには、いいながら、おじいさんは、自じ分の着きている半纏はんてんや、汚よごれて土つちなどのついている股引ももひきを見みながら、すぐかえに帰ろうとはいわずにちゆうちよしていました。

息子むすこはもどかしがって、

「おじいさん、さあ早く帰かえりましょう。会かい社の汽き車しゃにまにあわせたいものです。なにを考かんえていなさるのですか。こんなに汚よごれた半纏はんてんや、破やぶれた帽ぼう子しや、土つちのついた股引ももひきなどは、もう用ようが

ないのですからお脱ぎなさい。そして、私がここに持つてきた、  
 新しい着物あたら きものにきかえて、早くはやここを出でかけましょう……。」「とい  
 いました。

おじいさんは、長い間なが あいだ、自分の身じぶん みにつけていた仕事着しごとぎを未練惜みれんお  
 しそうに脱ぬぎながら、

「せつかくそういつて、迎えむかにきてくれたのだから、どうしても  
 帰かえらなければなるまい。俺おれはまだ、もうすこしくらいはここに  
 て、働はたらいていたいのだけれど……。」「と、ひとり言ひとごとのようにもら  
 っていました。

おじいさんは、新あたらしい着物きものにきかえて、自分じぶんのいままで身みにつ  
 けていた半纏はんてんや、股引ももひきや、破やぶれた帽子ぼうしをひとまとめにして、

そばにあつた、かもつじどうしゃ貨物自動車の荷にの上うえに乗せておきました。

「さあ、おじいさん、仕度したくがすんだら、すぐに出でかけましょう。」  
と、息子むすこはいいました。

おじいさんは、そこに居い合あわせた、仲間なかまに別わかれを告つげました。  
すると、その人ひとたちは、

「おじいさん、あんまり急きゆうじやないか。名残なごり惜おしいな。しかし、  
めでたいことで、なによりけつこうだ。無事ぶじに暮くらさつしやい。」  
といいました。

「さよなら。」

「達たつ者しゃで暮くらさつしやい。」

仲間なかまは、口くち々くちにいつて、おじいさんの出でてゆく姿すがたを名残なごり惜おし

そうに見送みおくつていました。それから、みんなは、また、自分じぶんたち  
の仕事しごとにとりかかつて忙いそがしそうに働はたらいていました。

このとき、一だい台の貨物自動車かもつじどうしゃが、会かい社しゃの門もんから出でて、町まちを  
過すぎ、ある田舎道いなかみちにさしかかったのであります。車くるまの上うへには、  
世帯道具しよたいどうぐがうずたかく積つまれていました。

もう、やがて春はるになろうとしていたが、まだ寒さむい風かぜが、野のや、  
林はやしを吹ふいていました。雲くも切れのした、でこぼこのある田舎道いなかみちを  
貨物自動車かもつじどうしゃは、ちようど酔よっぱらいの人の足あしどりのように、躍おど  
りながら、ガタビシといわせて走はしっていたのでした。たぶん、あ  
る家うちの引ひつ越こしでもあるとみえます。車しゃ台だいの上うへでは、机つくえが、  
いまにも道端みちばたへ飛とび出だしそうになるかと思おもうと、箱はこが、いまに

も転ころげて落おちはしないかと見みられましたが、それでも、それらは、  
 車くるまにしがみついて乗のせられたまま走はしっていました。ちようど、そ  
 のとき、なにかしらない別べつのものが、道みちの上うえに落おちたのです。自じ  
 動どう車しゃは、そんなことには気きづかず、そのまま走はしり過すぎてしま  
 いました。そして、さびしい道みちには、だれも見みているものはありま  
 せんでした。

車くるまの上うえから、落おちたものは、勘かん太たじいさんの会かい社しゃを出でるとき  
 まで身みにつけていた、半はん纏てんと股もも引ひきと帽ぼう子しでありました。おじ  
 いさんが、ひとまとめにして、荷にの上うえに乗のせておいたのが、その  
 まま走はしり出だして、ついに振ふり落おとされたのであります。

日暮ひぐれ方がたを告つげるからすが、あちらの林はやしの方ほうで鳴ないていました。

町の会社では、その後、みんなが思い出しては、勘太じいさんは、どうしたであろうとうわさしましたけれど、おじいさんからは、そののち、なんのたよりもなかったのです。そして、みんなからも、だんだん忘れられていこうとしました。

かれこれ一年ばかりもたつてからのことです。会社で働いている一人の若者が、ある日、町から五里ばかり、東の方へ離れている街道を貨物自動車を通つてくると、勘太じいさんが、ここに働いていた時分のようにすそつくりで、とぼとぼと街道を歩いてゐるのを見たといいました。

おじいさんを知つてゐる人々は、この話をきくと目をみはりました。



「それは、人ひと違ちがいだろう……。おじいさんは、息子むすこが迎むかえにきて、新あたらしい着物きものにきかえて帰かえったのだから、また昔むかしのようすにかえるというはずがない。」と、あるものはいいました。

「いいや、勘太かんたじいさんに相違そういない。俺おれは、よほど、自動車じどうしゃを停とめて、声こえをかけようと思おもったが、急いそいでいたものだから、つい残ざん念ねんなことをしてしまった。」

「おじいさんを見て、自動車じどうしゃを停とめないということがあるものか？」

「しかし、おじいさんなら、困こまれば、またここへやってくるにちがない。」

「いや、ああしていったん帰かえったのだから、きまりわるがついて

るのかもしれない。人間の運命というものは、いつまたどんな境きょうぐう 遇ぐにならないともかぎらないからな。」

「俺おれ、こんど見みつけたら、無理むりにも自動車じどうしゃに乗のせてつれてこよう……。。」と、若者わかものはいつたのでありました。

ある日ひのこと、おじいさんを見みたという若者わかものは、また自動車じどうしゃに乗のって、その街道かいどうを走はしっていたのであります。

「いつか、この街道かいどうで、おじいさんを見みたのだが、見みつかつてくれればいいがな。今日きょうばかりは、おじいさんをつかまえてやろう。そこで、場合ばあいによつたら、自動車じどうしゃに乗のせてつれてゆこう……。。」と、前方ぜんぽうをながめながら思おもっていました。

あちらに、森もりがあつて、その下したに人家じんかの見みえるところへ近ちかづい

たときに、若者は、行く手に勘太じいさんが、あの破れた帽子をかぶり、見覚えのある半纏を着て、股引きをはいて、その時分よりはずつと元気がなく、とぼとぼと歩いている後ろ姿を見たのであります。

「おお、おじいさんがゆく……。」「といて、若者は、それに追いつくと自動車を止めました。

「勘太おじいさんじゃないか？」と、若者は、わめきました。おじいさんはたちどまりました。そして、うしろを振り向きま

した。  
 「勘太おじいさんじゃないか……。」「

「ああそうだ。」と答えました。

「おじいさんか……。」「と行って、若者わかものは、顔かおをのぞくと、いつのまにかひどくおいぼれて、両方りょうほうの目めが腐くさっていました。

「おまえは、どうして、そんなにおちぶれたい……。」「と行って、若者わかものはため息いきをついたのです。

「いろいろ不幸ふこうがつづいてな。」

「息子むすこさんは、どうしたい。」

「死しんでしまった。」

「それは！ おまえも不運ふうんなことだのう……。なぜ、また早はやく、町まちへ出てこなかったのだ。」

「町まちへ……。」「

「これからゆくか？ もう、おまえに、そんな元氣げんきがないか？」

「ああ、ゆく。」——若者わかものは、あまりに変わかりかたがひどいので、どうしようかと思おもいましたが、みんなにつれて行って、おじいさんを見みせてやりたいような気きもしました。

このとき、あちらから、若い女わかおんなと、子供こどもらがこちらへ駈かけてきました。

「おらのおじいさんを、どこへつれていかつしやるつもりだ。」  
と、女おんなは大きな声こえでいきました。

若者わかものは、びっくりしました。

「町まちへ……。」

「町まちへ、なにしにき。だれがたのんだい。」

「俺おれは、勘太かんだじいさんと、町まちでいっしょに働はたらいたものだ。」

おんな  
 女は、あきれたような顔つきをして、

「勘太じいさんなんて知らない。うちのおじいさんは、もうろく

しているで、働けやしない。」

「じゃ、人違いか……。この着物はどうしたのだ。」と、若

者はききました。

この貧乏な、もうろくをしたおじいさんは、どこからか、捨

ててあったのを拾ってきて、それを着ていたということがわかっ

たのです。若者は、このおいぼれたじいさんが、勘太じいさん

でなかったのをしあわせと思いましたが、またべつな痛ましい感

じがして、そこを立ち去りました。なにも知らぬ子供らはめずら

しそうに、あちらを向いて、自動車じどうしゃの遠ざかりゆく影かげを無心むしんに

ながめていたのであります。

——一九二六・一——





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集2」丸善

1927（昭和2）年9月20日発行

初出：「童話」

1926（大正15）年3月

※表題は底本では、「なつかしまれた人《ひと》」となっており、  
す。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2020年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# なつかしまれた人

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>